

## 学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学, キャリアデザイン学部学生サポート委員会

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

191

(終了ページ / End Page)

227

(発行年 / Year)

2017-03

## 学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

学生活動サポート奨励金制度は、学生の自主的活動の促進を目的として設けられている制度である。2016年度には、10団体が奨励金助成を受け、各団体とも独自の意義ある自主的活動を展開した。その活動報告をここに掲載する。

各団体のメンバーは、それぞれの活動を通して、一定の成長を遂げたのではないと思う。そうした成長には、①知らなかったことを知るようになった、見えていなかったことが見えるようになったという成長、②知っていることでも、その知っていることに対する見方や意味づけが変わっていくという成長の2パターンがある。

各自、参加した活動の経験を通して自らがいかに成長しえたかを内省しつつ、今年度の活動の成果と残された課題に関してメンバー間で議論し合い、認識を共有して行ってほしい。今年度から、応募の枠組みに「ゼミ横断的な活動」と「ゼミ内メンバーの授業外活動」という2区分を設けた。活動報告内にゼミ名が記載されているものが後者に該当する。学生の自主的活動がこれまで以上に促進されることを期待する。

なお、本奨励金は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されている。記して感謝申し上げます。

(文責：坂爪 洋美)

# 未来のための「きっかけづくり」・「動機づけ」を応援したい ～ SIGNAL プロジェクト 2016～

高大連携プロジェクトチーム SIGNAL / 伊加拓馬

## 1 実施概要

本団体では、主に高校生へのキャリアサポート活動を実施している。毎年、4高校一浦和学院高校・千葉黎明高校・村田女子高校・足立西高校一を中心に年7回ワークショップを行う。会場については、本学で行う場合と対象となる高校で行う場合とがある。以下、詳細を記す。

### 【メンバー構成】

4年生…6名 3年生…7名 2年生…10名  
1年生…9名 以上全32名  
団体代表 幸喜優里 (3年)

### 【概要】

本団体は、キャリアデザイン学部生のメンバーで構成されている。「キャリア教育」「高大連携」「ピアサポート」の3つを軸に、主にワークショップを使ったキャリアサポート活動を、企画運営を通し高校での課題解決を実施している。また、発足当初より掲げている「きっかけづくり」・「動機づけ」を常に意識しながら高校生と交流を続けている。さらに、高校生への「きっかけづくり」だけではなく、私たちキャリアデザイン学部生が学部での学びを活かし、それをこの活動を体験することで深めていくこと、私たち自身のキャリアについても向き合うことを意識して活動している。

### 【実施活動】

○定例会

月に2～3回行うミーティングである。全メンバーが原則参加としている。話し合う内容は、高校との企画の進捗状況・諸活動の反省及び改善策・ワークショップの勉強会などである。原則参加であるが、出席率が毎回5割前後であることが問題点であり、参加者もいつも同じ顔ぶれとなっている。この問題は、高校生とのワークショップにおいて大学生のファシリテーターとしての質に差ができてしまい、それが全体の統制の取れなさにつながっているため、改善を急いでいる。

○キャリアサポート活動

\*実施時期と場所

- ①浦和学院高校 (埼玉県さいたま市) → 6月 (本学) 10月 (浦和学院高校)
- ②千葉黎明高校 (千葉県八街市) → 7月 (本学) 4月 (千葉黎明高校)
- ③村田女子高校 (東京都文京区) → 12月 (本学) 3月 (村田女子高校)
- ④足立西高校 (東京都足立区) → 3月 (足立西高校)

\*当日までの流れ

あらかじめ各高校の先生との連絡係を設置、企画の約2～3ヶ月前から連絡を取り始める

↓

この連絡で日時や高校側からのニーズを聞くと同時にコアメンバーを集める (約1ヶ月半～2ヶ月前)

↓

ニーズをもとに企画の目的とワークショップ

プの大まかな形を決定する（約1ヶ月半前）  
（ワークショップはキャリア教育プログラム  
やグループワークスキルを参考にする）

↓

コアメンバーのミーティングと定例会での  
ロールプレイでワークショップを完成させる  
（1週間前）

↓

リハーサルを行い、必要な備品などを準備  
する（1週間前）

**\*当日の流れ**

高校の先生へのあいさつ、高校生とのコミュ  
ニケーション

↓

アイスブレイク

↓

ワークショップ（大学生ファシリテーター1  
名対高校生約4～7名）

↓

高校生から感想、高校の先生から総括をい  
ただく

↓

大学生のみで反省ミーティング

**\*企画後**

- ・ 高校生に記入してもらったアンケートを  
集計して、メールで高校の先生にデータ  
とお礼の文を送付する。
- ・ 再度反省ミーティング（全体参加者の反  
省点とコアメンバー内での反省点）

**【まとめ】**

本団体は、高校とのキャリアサポート活  
動とその準備を中心に活動している。活動  
が立て続けにあるなど大変な時期もあるが、  
近年はメンバーの増加もあり、分担するこ  
とができています。活動の延長として、私た  
ち自身のキャリアについても考える機会や  
キャリア教育について話し合う機会を定例

会などで設けて、活動の質的向上をはかっ  
ている。

**2 結果・意義・所見**

以下で本年度における活動の報告と成果  
を述べる。

**【ヒアリング】**

プログラムの企画準備の前に、各企画責  
任者が高等学校の担当教員に対し、プログ  
ラムの方向性や参加人数などのヒアリング  
を行い、高校側のニーズに基づき、企画準  
備を進めた。高校側のニーズは多様であっ  
たが、一年生対象のプログラムには自分の  
価値観を明確にするものや大学での学びが  
イメージできるものが多く、二年生の終わ  
りには学部選択や社会とのつながりが意識  
できるものが多いなどの特徴がみられ、そ  
れぞれの学年に合った内容をニーズとして  
挙げていた。どの高校も生徒のキャリアデ  
ザインに対して積極的な姿勢を持っており、  
キャリア教育の認識の広まりを感じた。

**【企画準備】**

企画準備として、各企画のコアメンバー  
を中心に週2、3回のミーティングを企画実  
施日の約2か月前から行った。以下は主な  
プログラム作成の流れである。

1. ヒアリング結果・ニーズの共有  
代表者が高校教員へのヒアリングを行っ  
た結果を全体に共有し、高校生の参加人  
数やニーズを把握する。
2. 企画目的・ワーク目標の設定  
高校側のニーズに沿って、企画全体の目  
的（ねらい）とワークショップで意識す  
る目標をそれぞれ設定する。高校生が目  
的・目標を常に意識し、ワークショップ  
に取り組めるよう、なるべくわかりやす  
く簡潔な言葉にまとめた。

(例) 学習したことから、身についた力を考えよう

### 3. ワークショップの作成

設定したワーク目標に沿って、プログラムの核となるワークショップの内容を考える。前年度までは、価値観アイランドや6人の人生、RIASECなどの既存のワークを行っていたが、今年度からはほとんど自分たちのオリジナルで一から作成した。

### 4. アイスブレイクの作成

プログラムを行うにあたって、大学生と高校生及び高校生同士の緊張感をほぐすためのアイスブレイクを考える。単に緊張感をほぐすだけでなく、お互いの名前を覚えられるものやワークの導入になるものなどの工夫を凝らし、ワーク同様、今年度はオリジナルのものが多かった。

### 5. ロールプレイ・修正

企画の流れの確認と、ワークショップのロールプレイを行う。ロールプレイは実際の高校生を想定して、より企画当日の流れが意識できるようにする。ワークを実際に行ってみて、問題のある箇所を洗い出し、修正を加えたり、変更をしたりして再度ロールプレイを行う。この流れを何度も行い、企画全体のブラッシュアップを図る。

以上の流れに加えて、企画の進行表やワークマニュアルの作成、その他備品準備など、企画当日に向けて不備のないよう準備を進めた。今年度は新しく様々なワークが生まれ、学生にとっても自身の企画力・キャリア教育への認識を高めることができた。

#### 【企画実施】

企画当日の成果として客観的評価の観点から振り返ると、高校生に行ったアンケートにおいて、多くのポジティブなフィードバックを得ており、これからの自己と他者

のかかわりについて考えるきっかけになったのではないと思う。また、高校の担当教員からも同様に高評価をいただいた。

しかし、高校生に対するアンケートの「大学生に質問したいことを質問できたか」という項目については、他の項目に比べ、ネガティブな回答が多かった。これは企画構成上の問題とコミュニケーション上の問題があると考えられる。企画構成上の問題としては、ワークの目的・目標に縛られすぎて、高校生との自由な会話の時間をあまり取れず、かなり内容が詰まったものであったと感じた。今後は高校生の質問に答えるしゃべり場などを取り入れるなど、直接的に将来を考えたり、自分の価値観を知ったりといったことだけでなく、大学生とのかかわりも大切にしていきたい。コミュニケーション上の問題としては、高校生がいきなり会った大学生に質問をするにはかなり勇気が必要だということである。しかし、ここにおいて大切なのは、いかに大学生が高校生に対して話しかけやすい態度をとり、グループ内全員とまんべんなく会話ができるかどうかである。大学生と高校生との間で信頼関係（ラ・ポール）を築くことによって、高校生の中にある自由な発想や質問を引き出し、プログラム全体の満足度を高めることになる。今後は、大学生のファシリテーション能力の向上のために、定期的なロールプレイや研修などを行っていきたい。

#### 【活動全体の振り返り】

本活動を行っていく中で、企画力・コミュニケーション能力・キャリア教育に関する知識を高めることができた。本活動は実際に高校に行き、キャリア教育の実態を肌で感じるため、高校生が抱えているキャリアに関する不安や取り巻いている環境を高校生の視点に立って考えることができた。提携している各高校は、入学か

ら卒業までの3年間を通して、生徒のキャリアデザインの支援を段階的に考えており、SIGNAL以外の学生団体との交流や大学見学、社会人の方の講演会などを積極的に行っていた。またそれらの活動を単発で行うだけで、キャリア教育プログラムをイベント化してしまうのではなく、キャリアに関す

る学習を普段から行い、振り返り学習もしっかりと行っていた。こういったキャリア教育に熱心な高校とかがかわることができるのは、非常に光栄でめったにないことであるため、今後も引継ぎをしっかりと行い、提携を継続していきたい。

# 芸術分野に興味関心を持つ高校生に向けたキャリアサポート

代表者：荒川ゼミ 松橋友美

## 1 実施概要

私たち荒川ゼミ3年生は、芸術分野に関心を持つ高校生に向けて、芸術系大学進学後の多様なキャリアの広がりを知ってもらい、彼らの進路選択の一助となることを目的として、キャリアサポートのワークショップを実践した。

この企画に至った背景には、高校生が自分の将来のキャリアを見据える際、芸術系の大学は就職に弱いというイメージが強いゆえに、進学候補から外す傾向にあり、それはのちのち、アートに関連した領域において活躍する人材の減少につながるのではないかという問題意識があった。そこで、まず大学進学は高校生のキャリアデザインにとって非常に重要な問題であること、さらに私たちのゼミが「アートマネジメント」を専門に研究していることから、芸術分野に関心を持つ高校生を対象に、芸術系大学に関する情報を伝えるとともに、そうした大学への進学後のイメージ形成を助けるために、冊子制作とそれをういたワークショップを行うことにした。

### プロジェクトの準備・製作期間と内容など

以下は年間を通じた活動プロセスの概要である。

- ・ 6月23日～7月8日  
冊子に掲載する大学紹介の記事のため、芸術系大学4校のキャンパスへのフィールド調査を行った。
- ・ 7月8日～7月14日

学内でゼミの時間を使い、冊子の内容や構成を考え、各記事の担当者決めを行った。さらに、芸術系大学の在校生ならびに卒業生へのキャリアインタビュー記事のため、インタビューの担当者を決めるとともに、それぞれインタビュー対象者への依頼等も進めた。

- ・ 7月14日～9月22日  
担当者がそれぞれ、インタビュー調査とその記事の作成、大学紹介ページ等の作成、全体の編集などに取り組んだ。
- ・ 9月22日～10月2日  
記事原稿の最終確認を行い、冊子編集の最終段階を迎えた。  
こののち印刷会社に入稿。冊子完成。  
ワークショップの構成について検討を進める。
- ・ 10月4日  
ワークショップの本番に向けて全体リハーサルを実施。
- ・ 10月6日  
都立飛鳥高校にて第一回目のワークショップ実施
- ・ 10月20日  
東京成徳深谷高校にて第二回目のワークショップ実施
- ・ 10月21日  
法政大学附属女子高校にて第三回目のワークショップ実施

### 担当者一覧

#### 【冊子編集】

新井晃

※冊子掲載の記事は全員で分担執筆。

【ワークショップ】

- ・ 都立飛鳥高校：松橋友美、成田良子、坂井雅彦、増山良平、平野純樹

- ・ 東京成徳深谷高校：宮崎桃子、越智久美子、坂井雅彦、平野純樹、平野桃子
- ・ 法政大学附属女子高校：木村優布子、上村真菜、宮崎桃子、新井晃、松橋友美



冊子のレイアウト

## 2 結果・意義・所見

### 企画の成果

私たちは本ワークショップにおいて、芸術系大学卒業後の進路として、必ずしもアーティストになるだけでなく、民間企業における活動をはじめ多様なキャリアパスが可能であることを示すことにより、芸術系大学進学や卒業後の進路に対する理解不足や躊躇を改善していくことを目指した。そのために、美術系のキャリアパスを並べたYES・NOチャートを作り、それをもとに高校生たちが、それぞれ自分がどのような業種、職種に適しているかを興味深く探ることができるよう工夫した。と同時に、そのなかの幾つかの職業をピックアップし、それが具体的にどのような仕事なのかを、実際にその分野で働いている社会人にインタビューした結果などを交えて説明した。

それぞれのワークショップ終了後に、私

たちは効果測定のためにアンケート調査を行った。結果は、概ね高評価であった。例えば、美大へのイメージについては、95%が「良くなった」と回答している。このことは、ワークショップの体験を通して、美大または美大進学に対する高校生のイメージが明らかに改善され、進路に対する意識の向上が見られたことを意味している。それは、本企画のそもそもの目的である、「芸術系学校進学という進路の可能性と、その卒業後の多様な職業の広がりへの認識」が、ある程度達成されたことを示していると考えてよいだろう。

アンケートの自由記述においても、「このような機会ではしか聞けない美術大学生や卒業生の経験の話が聞けて楽しかったです。知りたいことをたくさん質問しているので、冊子をよく読みたいです」や、「美術関係の仕事は限られているイメージがあったが、色々な職業があるのを学んだ」など、ワー

クショップに対して積極的に評価する声を多数頂いた。

### 反省点と改善策

今回の企画に対する最も大きな反省点は、ワークショップの開催前に、あらかじめ各高校の生徒たちの意見やニーズを調査・把握しておくべきであったということだろう。

私たちはそれぞれのワークショップを開催する際に、最初に導入として、生徒たちが美術系の大学や美術系大学卒業者のキャリアパスについてどのようなイメージや情報を持っているのかを尋ねた。そこで初めて、高校生たちが芸術系の大学に対して具体的にどのように感じているのかを知った。その中身は、たとえば「就職が大変そう」とか「お金がかかりそう」など、私たちが事前に予想していたものと大きく違わなかった。とはいえ、今回のワークショップは、私たちが持参した冊子の内容にそって実施したため、もっぱらこちら側の主導で進められた。それゆえ、生徒たちが本当に知りたいこと、あるいは必要としていることを、十分に汲み取れていなかった可能性がある。

したがって、今後の改善策としては、あらかじめ訪問先の高校と双方向的なコミュニケーションを行い、そのなかで得た情報を土台として、より緻密なプログラムを組み立てていくことが望まれる。それによって、ワークショップの前後で生徒たちの意識がどれだけ変化したかについても、より正確な効果測定を行うことができるであろう。

### 他分野への応用の可能性

本企画を通して、高校生と現役大学生が直接進路について話し合うという機会をもったことは、高校生にとってかなり貴重な経験になったようである。彼らから見て一番近い未来像である私たち大学生と、より現実的な進路やキャリアについてディスカッションする場を持ったことは、高校生自身が進路選択に向き合ううえで大きな刺激になったことが、ワークショップの実施を通じて感じられた。

今回の企画は、美術系分野のキャリアパスの広がりを認識してもらうことを目的としていたが、このような企画自体は、他の分野についても応用することができるので



高校でのワークショップ風景

はないかと私たちは考えている。というのも、ある高校でワークショップを行った後に、担当の先生から、同じような企画を他の分野でもぜひやって欲しいと頼まれたからである。さらにまた、高校の生徒から、「美大をテーマにしたガイダンスはあまりないので」ワークショップに参加した、という声も聞かれた。こうしたことから、それぞれの専門的な分野について、高校生はなかなか十分な情報や理解を得る機会を持つことができないことがわかった。そこで、彼らが真に必要としているニーズに応えるために、今回私たちが行ったような企画を基本モデルとして、さまざまなバージョンへ

と応用していくべきだと考えるに至ったのである。

今回実施した企画の構成、つまり「ある分野における多様なキャリアの広がり」と「その分野で学ぶ学生+活躍する社会人」についての情報を冊子にまとめ、それをもとにワークショップを行う、という二段階からなるキャリアサポートは、芸術分野のみならず、例えばビジネス領域や教育分野にも適用することは十分に可能だろう。それは進路選択前の高校生たちにとって、大いに有意義なものになるのは間違いないと考えられる。

(文責：増山良平、平野桃子)

# 養護施設で暮らす子ども達が通う 小中学校でのフィールドワーク

代表者：遠藤ゼミ 西原麻里子

## 1 実施概要

離島にある小中学校（X島小中学校）でのボランティア活動を中心としたフィールドワーク調査を実施した。離島ということでこの小中学校の生徒数は少なく、ここに通う子どもたちは皆、児童養護施設で暮らしている。離島という狭いコミュニティで生活するという、養護施設で暮らす理由となるような複雑で特殊な家庭環境や経験を持つことから、子どもたちは何かしらの困難を抱えていると推測される。本企画では、夏季休業期間を利用し、この小中学校に3日間訪問した。子どもたちにとって、この3日間が「大学生」という先生とは異なる「大人」であり、身近に感じられるであろう“お兄さん、お姉さん”との交流を通して、新しいロールモデルの発見の場になるよう努めた。子どもたちにとって有意義な時間を提供することが目標であった。そして、子どもたちが感じている生きづらさに寄り添いながら、共に学び、遊び、楽しみ、喜びを分かち合うことで、子どもたち自身が価値観や自尊心を高めていくこと、気づきを得て成長していく過程の一助になりたいと願った。帰京後には、論文集を作成した。作成した論文集は学校・施設の先生方に読んでいただき、学生から見た子どもたちの姿を知っていただくことで、今後の指導の発展に貢献したいと考えている。

**準備期間：2016年6月～8月**

・6月末～7月中旬 学校と相談のうえ、3

日間のスケジュールを決定。

- ・6月 係決め（物資調達係、調理係、レクリエーション係、会計などの役割分担）。
- ・7月 会議（計画全体の確認と情報共有、レクリエーション内容の確認など）の実施。
- ・夏季休業期間中～実施当日 物資調達、レクリエーションの準備。

**実施期間：2016年9月11日（日）～13日（火）**

・レクリエーションの実施

学校側のご厚意で、初日と最終日にレクリエーションを行う時間をいただいた。

①名前ビンゴゲーム

はじめにアイスブレイクとして行った。このゲームは、自己紹介し合いながら相手の名前をマスに入れて埋めていくものである。16人と自己紹介をし合い、1つ質問（たとえば、好きな食べ物は？好きなスポーツは？など）をし、その答えもマスに書き込む。このゲームの目的は、子どもたちにはじめて会った人と話すことの楽しさや名前を覚え合うことの喜びを知ってもらうことであった。

②星人（グーチョキパー）ゲーム・ジェスチャーゲーム

星人（グーチョキパー）ゲームは、グー、チョキ、パーのいずれかを手で示しながら行う鬼ごっこである。ジェスチャーゲームは、出されたお題をジェスチャーのみで表現し、伝えるというものである。これらのゲームでは、子どもたちに身体表現の面白さを知ってもらうことを目的と

した。

### ③ジグザグリレー

ジグザグリレーは、並んでいるチームメイトたちの間をジグザグに走るリレーである。このゲームは、子どもたちに楽しみながら走る機会を提供することを目的とした。また、子どもたちと大学生とがチームとして一致団結することを目指した。

### ④フラミンゴ競争・人間知恵の輪

フラミンゴ競争は片足立ちのまま指定の場所から動かずに、出されたお題（その場でジャンプ、前の人とジャンケン、お辞儀をするなど）に挑戦するゲームである。このゲームの目的は、子どもたちに楽しみながらバランス感覚を鍛えてもらうことであった。

### ⑤ドッジボール

ドッジボールは、子どもたちが私たち大学生に本気で挑み、戦う機会を提供したいと考え行なった。ドッジボールを行うのは、毎回恒例になっているので、子どもたちも楽しみにしてくれていた。

#### ・授業の見学・参加

授業を見学させていただき、子どもたちに勉強を教えたり、体育や音楽の時間には一緒に参加させていただいた。

#### ・休み時間

小学生を中心とした子どもたちと一緒に、鬼ごっこやサッカーで遊んだ。また、中学生たちには、勉強を教えたり、授業の内容について話すなどした。

## 論文集の作成：帰京後～12月

### ・論文の執筆、論文集の作成

論文は、実際に子どもたちとかかわるなかで、気になった子どもたちの言動について多様な視点をを用い、想像力を働かせて考察し、子どもたちの心の機微を描いたものになるよう努めた。この執筆経験を通して、

私たち自身の偏ったものの見方に気づき、そうした見方が当事者にとって時には暴力となり得ることに気づくことができた。

作成した論文集は、小中学校と養護施設に送り、先生方に読んでいただく。子どもたちと日頃からかかわり続ける先生方に新たな視点を提供し、子どもたちへの理解がより一層深まることが期待される。先生方が多様な視点を持ち、子どもたちに接することで、子どもたちの様々な言動を柔軟に捉えることが可能になるのではないだろうか。

### その他

・先方との手紙のやりとりなどの交流の継続  
長期に渡って子どもたちとかかわりを持ち続けることで、相互の価値観にプラスの影響を与え合うことを目指していく。

## 2 結果・意義・所見

企画実施の結果、離島で生活をする子どもたちにとっての学び、我々大学生の学び、という2つ側面からの学びが得られた。

まず、子どもたち、及び学校が企画実施によって得られた学びについて3点述べていきたい。

1つ目は、企画実施により、子どもたちが離島にいる大人以外の大人と出会うことができたという点だ。離島という狭いコミュニティで生活する子どもたちは、学校の先生、島のお年寄り以外の大人と接する機会がほとんどない。多くの子どもたちは中学校を卒業して島を出て、はじめて学校の先生や島のお年寄り以外の人々と出会うことになる可能性すらある。そこで、先生でもお年寄りでもない“大学生”の私たちと接することは大きな意味があったといえる。なぜなら、大学生と関わることによって新たな人間関係を築くためにはどうしたらよ

いか子どもたちが考え、行動する機会になっていたからである。また、大人と子どもの間の大学生と「斜めの関係」を築くことを通じて、子どもでも大人でもない他者との接し方・コミュニケーションのとり方に関しての経験をつむことができた。その結果、コミュニケーションに対し広い視野を持てるようになるための一歩を踏み出す、という学びが子どもたちにあったのではないだろうか。

2つ目は、企画実施により子どもたちが、見ず知らずの初対面の大学生からも自分は大切にされる、受容される存在なのだと感じとれていた点だ。先述されたように、子どもたちはほとんど島の外の人と関わることがない。その中で「自分は初対面の誰にでも大切にされ、受容される人間である」と感じとることはなかなか難しいのではないかと考える。しかし、初対面の大学生に甘えながら、自分の気持ちを伝えながら、楽しい思い出を作ることができたことで「自分は大切にされる存在なのだ」という自信が子どもたちに芽生えたのではないかと考える。そして、この自信がこれから先、子どもたちが様々な人と出会い生きていく中での支えとなってくれればと強く思う。

また、子どもたちが新鮮な気持ちで、大学生とコミュニケーションをとり、楽しんでくれている様子が、大学生の記録を通してひしひしと感じられた。日常生活ではなかなかできないであろう経験をし、のびのびと振る舞ってくれることは、子どもたちの健やかな成長の一助ともなったであろう。

3つ目は、企画実施が学校の先生たちにとって、子どもたちの新たな面を発見する機会になったという点だ。大学生との交流のなかで、おそらく子どもたちは普段とは異なる表情をしばしば見せてくれた。この場面を学校の先生方と共有し、見ていただくことで、学校の先生方が子どもたちの新

たな一面に気づく機会となるといえる。そして、先生から子どもたちへの理解がより深まり、さらに親密な関係が築かれることに繋がると考えられる。また、何か学校内でうまくいかないことがあった場合、外部の人間の視点が入ることで今までとは違う視点をえることができ、問題解決につながるという可能性もあるだろう。

以上の3つの点が企画実施が子どもたちや学校の先生方にもたらした結果であり、学びである。

次に大学生が企画実施によって得られた学びについて3点述べる。

1つ目は自ら考えて行動することをつねに意識する点だ。本企画は、自ら子どもたちと積極的にコミュニケーションをとっていくことが非常に重要となる。もちろん、子どもたちの方から接点をもとうとしてくれることもある。しかし、そうはいかないことの方が圧倒的に多い。どうやったら目の前の子どもとコミュニケーションをとれるかを自ら考え、実行していく過程は、学生に自主性を身に付けさせることにつながっただろう。また、本企画は青山学院大学の教員と学生10人ほどと合同で行われたため、他大学の学生とどう意思疎通をはかり、うまく活動していくかも自ら考え、協力することが必要とされた。そのため、合宿前に何度も青山学院大学の学生たちと会い、親睦を深めた。そして合宿をどう進めていくかについて話し合い、みんなでよりよい合宿を作り上げるという一つの共通意識をもち、合宿をすごした。これらの点から、本企画は学生の自主的な行動が求められるものであり、学生に自主的に行動することの必要性を感じさせる、学びが多いものであったと考える。

2つ目は教育格差の実態とその支援についての内実を知り、学ぶことができた点だ。教育格差やその支援についての本は多数出

版されている。大学の講義でも取り扱われることが多い。しかし、多くの学生は机の上の勉強だけで、その格差や支援の現実を知らずに大学生を終えてしまうのではないだろうか。そのような学生の実態をふまえても本企画には非常に意義があるといえる。本企画を行い、教育格差の中で、一生懸命勉強をし、進路について考えている子どもたちと向き合い、一生懸命にその子どもたちの支援をする島の大人たちと向き合うことは貴重な体験である。実際に、私たちは2泊3日という短い合宿期間の中で、本の中や講義の中だけでは分からない、支援の難しさや子どもたちの抱える問題の深刻さ、子どもたちのつらさや悩みをまざまざと感じさせられた。そして、これから先も私たちは離島で暮らす仲間たちへ思いをめぐらしながら日々の勉強に励んでいくことと思う。ただただ毎日を過ごしているだけでは、このような経験はすることができなかつたことだろう。

3つ目は、子どもたちとの生活について記録をし、その記録を元に子どもたちの行動や心情について論理的に分析する点だ。ボランティアをただ実施するだけで終わらせずに、子どもたちとの関わりの中で自分た

ちが疑問に思うことを問いとして、論文を執筆する。離島の子どもたちは、もともと住んでいた場所と親から離れ暮らしている。おそらく様々な問題を内面に抱える子どもたちに、東京に帰ってきてからも思いをはせ、自分ができる限り子どもたちについて考え、悩み、論文を執筆する。この作業は決して簡単なものではなく、1人でやりぬくことはできない。だから、教員やゼミ生に協力してもらいながら、やり抜くのである。このことで他者と協力しながら自らの目標＝論文を書き上げるということ、論理的に分析することを経験できる。さらに、子どもたちの様子を記録し、分析することは後の様々な支援や研究の手助けともなりうる。そのような論理的で説得力のあるものを書くためにはどうすればよいのかを考えていくことも企画実施における学びの1つといえるだろう。

以上の3点が企画実施によって大学生が得られた学びである。子どもたち、学校の先生方、大学生の3者に学びがあった本企画は企画実施に大きな意義があるものだったと考える。そして、子どもたちや学生のこれからに大きな影響をあたえていくものであろう。

# 平成の市町村合併で合併を選択しなかった村を調査する

～長野県大鹿村の事例から～

代表者：金山ゼミ 野老杏佳 三宅久美子

## 1 実施概要

私たちは今回、長野県にある大鹿村への現地調査を行った。その理由は、平成の大合併で次々と市町村が合併したにもかかわらず、長野県の山岳部に位置する大鹿村は合併をしなかったからである。そこで、なぜ長野県大鹿村はあえて合併を選択しなかったのか、大鹿村にスポットを当てて現地調査することを企画した。合併は行政サービスの向上や行財政の効率化などのメリットがある一方で村の名前や歴史の消滅、住民の声が行き届き難くなるなどデメリットもあり、合併は住民にとって生活や自治権に大きな影響を与えるものである。それらを踏まえて合併しなかったことによって村としてのキャリアはどうなったのかを調査した。また、Iターンの受け入れを盛んに取り組んでいることから、Iターン移住者自身と移住を受け入れた村はどのようなようになったのかインタビュー調査をもとに調査していった。その結果を通じて、まちづくりを成功させるためのポイントは何か、まちづくりをするにあたって行政と住民にはどのような意識の差があり、双方の連携を図るために必要なことは何かを明らかにすることが今回の企画の肝である。

合併をしなかった村の実態を調査するために大鹿村の8施設、団体を対象にと調査し、また、大鹿村でのフィールドワークを行い、報告書にまとめた。対象施設は、中央構造博物館、ろくべんかん、赤石荘、観

光協会、佐倉屋、風月堂、大鹿村役場、あんじゃネットである。

### 事前調査

日程 2016年 5月13日～15日

・大鹿村での現地調査

5月13日

中央構造博物館

現地調査

ろくべんかん

現地調査 職員へのヒアリング調査

赤石荘

現地調査 主人へのヒアリング調査

5月14日

観光協会

現地調査 会長、副会長へのヒアリング調査

佐倉屋

現地調査 主人へのヒアリング調査

風月堂

現地調査 主人へのヒアリング調査

5月15日

大鹿村役場

副村長、教育委員会へのヒアリング調査

あんじゃネット

職員へのヒアリング調査

### 調査担当

吉澤耕平 担当：大鹿村役場

小菅桂子 担当：赤石荘、あんじゃネット

小峰花絵 担当：ろくべんかん、教育委員

	会
菅原徹	担当：風月堂
相馬竜也	担当：赤石荘
三宅久美子	担当：佐倉屋
野老杏佳	担当：ろくべんかん、大鹿村役場
村上晴香	担当：風月堂
長田萌	担当：観光協会、教育委員会
根本稚子	担当：観光協会、あんじゃネット
渡邊亮司	担当：佐倉屋

## 報告書作成

日程 2016年 12月 20日

- ・大鹿村に提出する報告書の印刷、製本  
担当：全員 調査を踏まえ、具体的な提言を全員で考察し報告書としてまとめた。報告書の印刷、製本を行った。

## 報告書提出

日程 2017年 2月 18日（予定）

- ・大鹿村に報告を提出する 担当：相馬竜也 小峰花絵 報告書が大鹿村へ郵送で提出する予定である。

## その他

- ・フィールドワークまでに、大鹿村のあゆみ、観光、村情報の事前調査を行った。また、大鹿村の伝統の一つである大鹿村歌舞伎への理解を深めるため、映画『大鹿村騒動記』の鑑賞を行った。

## 2 結果・意義・所見

事前調査で分かった評価を基に、現地でのフィールドワーク、ヒアリング調査を行った。大鹿村の合併について質問の必須項目とし、さらに大鹿村に深く関わりを持つキーパーソンとなる方々に様々な立場からヒアリング調査を行った。赤石荘の主人へは、

村民の視点からの大鹿村での生活、子育て、村歌舞伎についてヒアリング調査を行った。観光協会へは行政の視点からのまちづくり、人口減少の問題の要因に関わる雇用特に観光業についてヒアリング調査を行った。佐倉屋の主人からはIターンで移り住み長年暮らしている立場として村民との関わりや村会議員としての大鹿村の課題についてヒアリング調査を行った。NPO法人あんじゃネットでは大鹿村で設立した経緯、サービス内容でもある介護や子育て、福祉サービスについて大鹿村が抱えている課題についてヒアリング調査を行った。教育委員会へは文化施設の運営や教育委員会の立場からの村歌舞伎について、村の教育サービスや課題についてヒアリング調査を行った。そして大鹿村役場へは行政の面から見た市町村合併について深く聞き、今後の開通が決定したリニアや雇用、Iターン政策などについてヒアリング調査を行った。

調査から大鹿村の合併についての意見をIターン者、Uターン者、地元民の三種類の立場と意思の強弱を分け特徴を明らかにした。そして整理した意見を基に合併を選択しなかったことは良かったのかどうか評価した。また大鹿村を構成するキーワードとなるものを「自然、歌舞伎、福祉、リニア、災害、交流、教育、暮らし、仕事、行事」に分けて村の生活を分析した。今後の村の活性化のためにSWOT分析を行いクロス分析からいくつかの提言をし、報告書にまとめた。さらに報告書が大鹿村の村民に読んでもらうことによって自らの村について知り大鹿村に還元する役割もふまえている。

以下は報告書の評価である。

今回の調査から見た大鹿村の評価を合併の中心に評価していく。評価として大鹿村の村民は村への関心が強く、合併をしない選択は正しかったと言える。

総合的に合併反対派が合併賛成派よりも

多く、特にIターン者はほとんどが合併反対派であった。自然の豊かさや小規模の自治体の運営に魅力を感じ移住したIターン者は村の状態が変化しうることを望まない。また地元民からは大鹿村という地名や歌舞伎などの歴史、伝統を守り続けたいという願望が強く、合併のメリットを感じていない。地元民の多くは大鹿村での暮らしに満足しており村をこのまま維持していきたいと思っているようだ。一方で合併賛成派は今後の人口減少の深刻化や限界集落の懸念を抱いており、合併論争があった当時より現在の方が人口減少が進んでいるため合併した方が良かったのではないかという意見があった。しかし近年大鹿村に移住して子育てを行うIターン家族もおり村の学校は存続されている。少人数教育により質の高い教育が行われ、今のところ人口問題は深刻ではないと捉えている住民がいることも分かった。中間派という反対でも賛成でもない住民もおり、合併の住民投票のやり方について述べている住民もいた。合併反対派、賛成派、中間派と立場は様々だが大鹿村の住民の多くは大鹿村への関心が高く今後村がどうなっていくべきかしっかり考えていることが分かる。

また大鹿村の暮らしを村民のヒアリング調査から「自然、歌舞伎、福祉、リニア、災害、交流、教育、暮らし、仕事、行事」に整理した。合併の選択については大鹿村としての存続を望んでいる一方でより深い暮らしについては不安も多く見受けられた。様々な村民に共通して人口減少への不安を抱えていた。人口減少の要因として生活の不便さや村に雇用がないことが関係している。そのような状況の中でも教育面では少人数教育は生徒に対して目が行き届くという点がメリットであると村民は捉えている。また、村では高校に通うためのバスの無料化がされている。

福祉面では、Iターン民への手厚い支援をすることにより、Iターン民を呼び込む努力をしている。これが人口減少の抑止力になっている。村に移住してきたIターン民は村の福祉に魅力を感じているだけでなく、自然への強い想いがあってやって来る。しかしこのIターン民と地元民の関係性は薄いというのが現状である。

そんな村民同士の関係性の問題がある中、一致して問題視していることがリニアである。特にIターン民が反対しており自然を守りたいという声が多い。Uターン民や地元民も同様であり、リニア開通にあたっての自然への影響が懸念の一番の理由となっている。Iターン民の中には自分たちの意思を持ちながらもできるだけ地元民に合わせようとしているという声もある。

交流面では、近所の人同士がお互いを気にかけているので孤独死がないという意見が聞かれた。近所の人だけではなく、NPO法人「あんじゃネット」の活動が村民の交流の手助けをしている。ほかにも商店に食事だけでなく子供や若者、高齢者が集まり交流できるようなスペースも設けてあった。このように人とのつながりが強いいため、村人同士の事はわかってしまう。しかしこれも孤独死を回避していると考えられる。

行事面では村歌舞伎で高齢者だけが行うのではなく若い人も積極的に参加し村人同士の交流ができています。村の行事である大切な歌舞伎でもIターン民の人が手伝ってきってくれるという声があるように地元民とIターン民を行事がつかないでいる。

大鹿村の村民の生活に密接な関係を持っているのが大鹿村の自然である。日本一美しい村連合にも加盟しており、自然の豊かさには秀でている。過去に三六災害という大きな災害があり、そこで多くの死者が出たということもあったが、地元民が発している今の自然を残したいという声や自然の

ままがいいという声はIターン民やUターン民も同様であり、村民は大鹿村の自然に強い思いがある。

人口が少ないが故に福祉面での手厚いケアや、人と人との繋がりの強さが魅力的である。以上のことから合併をしないという選択は正しかったと言える。しかし今後の課題も浮き彫りになった。それは少子高齢化の深刻化や雇用が少ないことである。またIターン者と地元民が互いをまだ十分に理解できておらず、地域全体が一つになっていけるとはいえない現状がある。大鹿村の人々が幸せに暮らしていくにはIターン者と地元民の共生と、新たな雇用の創造、及び人口増加のための施策を講じる必要がある。

### 現状評価を基にしたまとめ

今回大鹿村を調査して合併についての話の中で村民に共通して感じられたことが大鹿村の自然への思いであった。また村内を歩いてヒアリング調査をした際に村の政治について自分の意見を持っている人が多く、村のことは役所に任せるのではなく村民一人一人が作っていていると感じられた。人口千人の小さな村だからこそ村民としての意識が強く、村に必要なことを村民も役場も察知しやすくなっている。そこに合併という大鹿村の存続を揺るがす危機を経験したことによって村としてさらに強い繋がりが生まれたのだと考えられる。

# キャリアデザインからみるコミュニティの在り方

代表者：酒井ゼミ 福生プロジェクト／濱口綾子

## 1 実施概要

キャリア選択を行う上で影響を与える“コミュニティ”や“他者”をテーマに、東京都福生市を中心に地域活性を主軸として活動するNPO 団体法人と産学連携のイベントを計4回実施。外部から様々な働き方や生き方をする講師をゲストとして招待し、キャリアデザインの観点から地域やコミュニティの影響を検証した。

活動期間 2016年5月3日（火）～2017年1月15日（日）

企画打ち合わせ日程

- 5月3日 NPO 法人FLAG と東京都福生市米軍ハウスにて打ち合わせ（NPO 法人FLAG 代表 佐藤史織，副代表 佐藤竜馬，田中克海）
- 5月14日 NPO 法人FLAG と東京都福生市米軍ハウスにて打ち合わせ
- 6月6日 NPO 法人FLAG と東京都福生市米軍ハウスにて打ち合わせ
- 6月18日 FB ページ立ち上げ
- 7月5日 ファシリテーターとして協賛を得るため株式会社リクルートキャリアと同社で打ち合わせ
- 7月17日 NPO 法人FLAG とイベント第一回に向けて打ち合わせ
- 7月30日 第一回「HOW TO」～ポートランドにみるスモールビジネス～  
場所：東京都福生市 NPO 法人FLAG 事務所

講師：吹田良平（株式会社アーキネティクス取締役）

8月20日 第二回「HOW TO」～農と食にみるスモールビジネス～

場所：東京都福生市 NPO 法人FLAG 事務所

講師：島田雅也（野口種苗研究所）

9月12日 NPO 法人FLAG と昭島モリタウンにて打ち合わせ

9月30日 株式会社リクルートキャリアと同社にて打ち合わせ

10月29日 第三回「HOW TO」～ニューヨークと東京にみるスモールビジネス～

場所：東京都青山『PIZZA SLICE2』

講師：猿丸浩喜（株式会社 PIZZA SLICE TOKYO 代表取締役）

11月23日 NPO 法人FLAG と福生にて打ち合わせ

12月17日 第四回「HOW TO」～“場”からみるコミュニティ～

場所：表参道246 コミュニオン WIERD CAFE

2017年

1月15日 NPO 法人FLAG と東京都市ヶ谷駅 STARBACKS にて打ち合わせ

2016年

9月29日 法政大学懸賞論文 製作・提出

プロジェクト企画運営メンバー  
濱口綾子・金丸梨緒・伊藤慶

## 2 結果・意義・所見

新たなキャリア支援の形としてNPO法人や人材派遣の企業などと産学連携のイベントを今後も実施していく。

日本では、新卒の社会人が3年以内に離職する割合が約3割\*であり、就職においてミスマッチが起こっている。こうした実態の課題として『自分に合う、働き方や生き方に出会う機会の欠如による知識・情報の薄さ』に起因していると仮定し、学生のキャリア選択における視野と可能性を広げることを目的としたイベントを計4回実施した。

イベントの集客は、第一回が大人22名、学生が12名、計34名。第二回目大人3名、学生3名、計6名。第三回目は大人9名、学生8名計17名。第四回目は大人8名、学生1名、合計9名といった結果である。本イベントを通して、人生選択に影響を与える機会やコミュニティをつくるといった目的では、Facebook上のイベントページを利用し参加者同士が関わり合うプラットフォームを構築したことが成果として挙げられる。本イベントの参加者からは、所属するコミュニティを一つ増やすことができたという声があった。

一方、キャリア支援イベントとして、認知の拡大や、テーマ設定の明確化、イベントの運営・企画といった多くの面で今後改善していく余地が多い。

イベントのテーマとして“スモールビジネスからみるキャリアデザイン”を掲げており、地域に根ざした、生活と働くことの距離が近いキャリアを中心にクローズアップをした。今後、少子高齢化やグローバル化などにより社会構造は変化し、IoT、AIの導入は市場に効率を与え、ヒトの働き方は大きく変わると予想される。そのような社会の中でこそ、人は人のぬくもりを求め、出会いの機会を求めると考える。生活と働

くことが近い“スモールな生活”を紹介していくことは、地域の活性にもつながり、今後のキャリアを形成する上でも「どのように生きていくか」の選択肢を広げるという意味で、地域活性を軸に活動するNPO法人との産学連携イベントは行う意義があったと考える。

イベント実施までの概況としては、東京都福生市の米軍ハウスで地域活性を中心に活動するNPO法人FLAGと打ち合わせを行い、イベントの概要や目的、課題感を話し合った。スピーカーとなるゲストのアポイントをとり、すり合わせを行ったのちにイベントを開催。告知方法としてはFacebookのイベント専用アカウント内でイベントページを作成し、招待機能や共有機能を使い不特定多数へアプローチを行った。学生に向けた告知としてはキャリアデザイン学部の教授が受け持つ講義でキャリア教育などの授業と関連させ、数回告知を行った。その際ポスターを配布し、直接的な集客方法をとった。

4回のイベントから、大きく分けて3つのことが所見として考えられる。

1つ目は、コミュニティ減少の問題である。“グローバル”な時代の到来がささやかれるなかで、都市でありながらも地元や地域を大切にしていける取り組みは現代問題視されているコミュニティの減少や人とのかかわりの希薄化を解決するヒントになるのではないかということである。

2つ目は、新たな挑戦から得る“気づき”である。農と食をテーマにしたイベントを通して、「自分の食べ物くらい自分で作る」ということ、就活に失敗しても希望はあるということ、コミュニティの大切さ、キャリアデザインについて理解が深まった。普段考えることのない種苗の話など、たくさ

んの「気づき」がその場に生まれた。日常から離れた場へ足を運ぶことの重要性を感じた。

3つ目は、“やりこむ”ことの意味である。自分の好きなことを仕事にするだけでなく、それを経て自分自身を成長させた猿丸氏のイベントでは、今後働くことを選択する私たちに「楽しくないなら自分で楽しくすればいい。その結果自分自身が成長することができる。」という“やりこむ”ことの重要性を教えられた。

最後に、空間やデザインが与えるコミュニティの価値観である。今回連携したNPO法人は東京都福生市の米軍ハウスを拠点に活動しており、イベント第1回、第2回目はオフィスである米軍ハウスで開催した。3回目はゲストスピーカーであった猿丸浩喜氏が経営する東京都南青山に位置する「PIZZA SLICE2」で行った。第4回目は表参道に位置する246 COMMONの「WEIRD CAFÉ」で開催を決めた。これらの共通点としてはコミュニケーションが生まれやすい空間を意識しているということである。机をあえて置かないことで、隣との距離を近くしたことや、米軍ハウスではドアや窓を取り外

した開放的な空間をつくることにより、会話やコミュニケーションが生まれやすくなる環境を作り出した。キャリア形成といった内容であるからこそ、肩張った講義形式ではなく、他人と交流を持ちながら自らの視野を広げていくという機会を提供することにおいて空間やデザインは関係があるのではないかと考える。人生に影響を与える他者と機会の提供をしていくなかで、コミュニケーションを作り出す空間というものは重要な要素になりうるという新たな発見があった。

今回スモールビジネスから考えるキャリアデザインというテーマ設定はあったものの、結果としてスモールビジネスが地域活性につながることや、コミュニケーションの生まれる空間の定義があるなど様々な観点を交えてキャリアを捉えられることができた。

今後は働くスタイルの提案や空間や環境など、異なる見方からキャリアについて考えていくことができる。

\*厚生労働省平成29年年度新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移より

## 飯田水引活性化プロジェクト

代表者：酒井ゼミ 飯田水引チーム／當間由佳

### 1 実施概要

長野県飯田市の伝統工芸品“水引”産業を活性化させるプロジェクトを行い、報告書にまとめた。

プロジェクト内容については、水引産業の現状調査。また、2017年度の夏に開催される鉄道会社のキャンペーン参加へ向けた実績づくりを行う。

酒井ゼミの他に、長野県飯田市役所、南信州・飯田産業センター、飯田 OIDE 長姫高等学校、在来屋（弁当屋）を提携先とし、活動を行う。

事前準備 日程 2016年5月3日～28日

- ・昨年度の水引産業活性化プロジェクトのふりかえり、課題の抽出
- ・水引産業の現状調査（データ、資料による調査）
- ・水引産業活性化プロジェクトに向けた連携先の企業探し

6月11日～12日  
長野県飯田市役所 現地ミーティング

- ・今年度活動内容の意見交換・決定
- ・ミーティングを元に、鉄道会社への提案書の作成 担当：全員
- ・今年度のプロジェクトスケジュールを作成
- ・参加者  
長野県飯田市役所 上沼さん  
南信州・飯田産業センター 南島さん  
飯田 OIDE 長姫高等学校 浅井さん  
法政大学酒井ゼミ 酒井先生・當間・高風・

畑野

8月3日  
長野県飯田市役所 現地ミーティング

- ・プロジェクトにおけるコンセプトの意見交換
- ・現在の活動の進捗
- ・今後の活動の役割の確認、意見交換
- ・参加者（酒井ゼミ側 酒井先生、當間・坂詰。他6月11日～12日と同じ）

9月21日  
早稲田駅 お弁当試作品作成 担当：當間・高風・畑野

- ・長野県飯田市役所、飯田 OIDE 長姫高等学校に提出するお弁当の試作品を作成
- ・長野県飯田市役所、飯田 OIDE 長姫高等学校、連携先のお弁当屋さんである在来屋宛の報告書作成 担当：全員

10月6日  
懸賞論文の提出

- ・昨年度の水引産業活性化プロジェクトと、今年度の調査より新たなマーケットの創出について論じる 担当：全員
- ・書類の作成、郵送

10月7日  
長野県飯田市役所 現地ミーティング

- ・お弁当販売における当日に向けた打合せ
- ・お弁当の試食
- ・お弁当販売時のチラシ、アンケートの作成 担当：全員

- ・参加者 6月11日～12日のメンバーに加え、在来屋、飯田 OIDE 長姫高等学校生徒 10名程度

10月29日～30日

しながわ観光フェアへ参加

- ・「ご縁結び弁当」販売
- ・チラシ配布による広報活動、水引認知やイメージについてアンケートの実施
- ・活動報告書の作成 担当：全員
- ・鉄道会社へ向けた提案書を作成

2017年1月20日～21日

大学連携会議「学倫 IIDA」全体会への参加  
担当：當間・高風・畑野

- ・提携先とのミーティング
- ・慰労会
- ・水引産業の新たなマーケット創出についての発表、ふりかえり

## 2 結果・意義・所見

酒井ゼミは平成25年度から長野県飯田市の伝統工芸品である飯田水引の活性化に向けて活動を行っている。初年度に行った関連機関へのヒアリング調査より明らかとなった

- ①飯田水引における企業間連携かつ行政との繋がり強化
- ②各企業の企業力向上
- ③水引マーケットの確立

という三つの課題をベースにその課題解決に向けたプロジェクトを行っている。今年度は課題③の水引マーケットの確立に向けて、2017年夏に行われる JR グループの信州ディスティネーションキャンペーンにて飯田水引を使用した駅弁を製作・販売してもらうべく、飯田水引活性化プロジェクトの提携先（※）や JR 東日本長野支社に向けその提案を行った。

現地での会議（試食会含める）を3回と、実際に作成した弁当の販売イベント（品川観光フェア）、現地での大学連携会議「学倫 IIDA」全体会での発表を行った。

今年度は昨年の反省から、③水引マーケットの確立のための課題としてさらに

1. 多くの人に水引を認知してもらう
2. ビジネス要素を高める
3. モノを引き立てる水引の特性を生かす

の3つを挙げ、これを解決するため「世界級リゾートへ、ようこそ。山の信州」がコンセプトである2017年の信州ディスティネーションキャンペーンに目をつけた。そもそも、信州長野への観光客増加に向けたキャンペーンであり、“おもてなし”をキーワードにイベントを行っているなど、飯田水引との親和性が高い。

※飯田水引活性化プロジェクト提携先

長野県飯田市役所  
南信州・飯田産業センター  
飯田水引協同組合

### ○飯田水引×JR 駅弁の提案

JR グループの信州ディスティネーションキャンペーンにて販売するお弁当を包む紐に水引を使用することを提案。JR 東日本長野支社より条件が合えば一緒にやりたいとの返事、だがその時の段階では企画の詳細が未定だったため判断は延期。提案に説得力と客観的視点を持たせるため、飯田水引活性化プロジェクトの提携先と飯田 OIDE 長姫高等学校の協力の下、実際に提案する例となる弁当「ご縁結び弁当」を作製・販売する。

### ○「ご縁結び弁当」に関して

ご祝儀袋を連想させる縁起物らしいパッケージ。形作られた水引に色ゴムを組み合わせて弁当を縛る。水引の結び方は梅結びとする。「梅」は縁起の良いものとされており、運気を良いものにし運命を向上させる

とされている。また、梅結びは5つの円が重なって作られることからコンセプトであるご縁＝五つの円との連想することが可能。また、新たな水引の使い方をPRするため、使い終わった水引は箸置きや髪留めとしても使用可能にする。

#### コンセプト「縁を運ぶ、ご縁結び弁当」

水引にある、魔除けの意味や人と人を結び付けるといった意味から神聖な場で使用することが多い水引の性質や、水引の現在広く周知されている利用用途であるご祝儀袋の高額金額を包むイメージに注目した。そこから、さまざまな良運を引き寄せるといった意味を込めたコンセプトを提案する。梅結びが五つの円で構成されることから、五つの円＝ご縁も連想させる。良縁を引き寄せ結び付ける弁当を製作する予定。

#### ○しながわ観光フェア

しながわ観光フェア（※）にて、ご縁結び弁当を販売。購入者、通行人に飯田水引に対する聞き取り調査を行った。10/29(土) 40個、10/30(日) 30個の計70個のお弁当を完売させた。当日は飯田市から高校生に来てもらい、飯田水引活性化プロジェクトチームで力を合わせてお弁当のPRを行った。ここでの様子は本校のフォトジャーナルでも紹介させていただいている。

#### ※しながわ観光フェア

品川区の区制70周年を記念したイベント。2016/10/29(土)～2016/10/30(日)の計2日間開催。大井町駅付近で物販やステージショー、イルミネーションなどが開催された。

#### ○弁当作製・販売の反省点

弁当作製・販売の反省点としては2つ。一つ目は、水引と知らず購入されていたり、高校生が販売していることが売りになってしまったりと、目標としていた“水引が購

買理由”とすることができなかったこと。二つ目は、水引弁当の紐から箸置きにできるという二段階の使い方が伝わらず、パッケージを再利用するという概念がないため、あたりまえに捨てられてしまっていたことが挙げられる。どちらも、パッケージや販売の際のアプローチにもっと工夫、インパクトが必要であったと考える。

#### ○提案の結論

弁当の販売・聞き取り調査を行った結果、水引自体の認知度は高く、飾りやアクセサリとしての印象もよかった。したがって駅弁の結び紐からアクセサリや小物などへの再使用の転換も見込まれ、購入者の旅の楽しみの一つになる。また、水引があることで駅弁の見た目が華やかになると共に特別感を与えることができる。これらは駅弁の購入意欲に繋がると考えられる。飯田水引は伝統工芸品としても、地場産業という点でも、長野を代表するものである。DC長野にとって飯田水引を取り入れることで長野の伝統を伝えられ、そして「世界級リゾートへ、ようこそ。山の信州」という世界級リゾートのおもてなし力の向上に繋がれると考える。

#### ○プロジェクト通しての結論

上記のように提案を結論づけることができた。このことより再度JR東日本長野支社へ企画の提案を行う。今回のプロジェクトを通して水引弁当に対する客観的意見が得ること、また、水引の価値、優位性を認識することができた。

このことより、今後もJRにおける信州ディスプレイーションキャンペーンに向けてだけでなく、様々な企業・モノに当てはめて、今年度設定した課題の解決に取り組むことで水引マーケットの確立につながると結論付ける。

# 情報実習支援・映像制作・取材

代表者：坂本ゼミ 木暮健太

## 1 実施概要

学校外の活動において私たち坂本ゼミは主に2つの場所にて現地調査を行った。

### (1) 東日本大震災の被災地での取材とインドネシア学生との交流

実施期間 8月19日～22日

特定非営利活動法人、地球対話ラボの支援を行った。

8月20日 宮城県石巻、宮戸島における現地調査

石巻市立大川小学校 現地調査  
南浜つなぐ館 現地調査

8月21日 宮城県宮戸島の小学生の授業支援

地球対話ラボが提案した iPod を使って宮古島の魅力を小学生に撮影してもらう企画の支援に回った。

8月22日 福島県南相馬市の現地調査

福島県南相馬市の小高地区や南相馬市をバスで見学

### (2) カンボジアでの映像制作を活用した異文化交流

事前準備 福島県立四倉小学校においてトントローチ小学校に送るビデオメッセージを作成するために現地に行き授業支援を行った。

実施期間 12月18日～12月26日

### 主な内容

12月18日～12月22日

カンボジアの首都、プノンペンにおいて現地メコン大学生とのデジタルストーリーテリング作成のための現地調査  
約9班に分かれて行われた

今年のテーマは、メコン大学生の個性を頼りに撮影したいものを撮影し、制作してもらった。

12月21日

トントローチ小学校において、日本の小学生とカンボジアの小学生が動画（デジタルストーリーテリング）を通じての交流を行うための授業支援

ビデオメッセージを見てもらった子供達が今度は四倉高校の市小学生にビデオメッセージを作るため、授業支援を行った。

12月22日

ポル・ポト政権時に行われた歴史的事件を知るための現地調査

キリングフィールド 現地調査  
トゥールスレン収容所 現地調査

12月24日

カンボジア シェムリアップにての歴史調査

アンコール・ワット 現地調査  
アンコール・トム 現地調査

12月26日

シェムリアップ、アンティエ幼稚園における教育支援と現地調査

### 調査担当

(1) 合宿であったため、全員で現地に足を運んだ

木暮健太、石井果奈、中野伶音、清水南美、半野可南子、瀧澤美波、塙雄貴、中田果南、鈴木杏奈、倉成由佳、石塚ちひろ、伊藤香菜絵、牧田美和子

(2) この研修に関しても振り分けはない

木暮健太、石井果奈、中野伶音、清水南美、半野可南子、瀧澤美波、塙雄貴、鈴木杏奈、立壁祥子、福井佑典

## 2 結果・意義・所見

### (1) 東日本大震災の被災地での取材とインドネシア学生との交流において

メディアでは伝えられない情報が数多くあること、現地で学ぶことによって得られる情報があるということ。

被災地においては復旧が早くとりかかられた地域と、放置されている地域の格差が大きく見られた。一部の地域では新たな住宅地が出来上がり、ショッピングモールなども建設されている場所も見られたが、津波で流された元の市街地、原発から近い地域には、店を立て直したりしても、そこに住む住人がいない現状を私たちは理解した。震災から5年経った今でも復興があまり進んでいない地域も見ることができ、復興の難しさを目の当たりにした。被災体験を踏まえた相互的な異文化・異世界の交流においては、スマトラ沖地震と東日本大震災というどちらも甚大な被害をうけた人同士の相互理解が日本社会において多文化性への認識と外国に対する許容性の広がりにつな

がると考えた。震災における共通の目的を達成していくために、絶えず相互作用しながら、差異に対して関心を持ち、理解を示していくシステムが構築され、個人の人間性を認め合い、異文化の豊かな交流が実現していくと考える。異文化における共通の問題の共有は異文化交流を促進しているのだと感じた。

課題として考えられるのは、日本人が海外の人と比べて閉鎖的であることが考えられる。21日に小学生がインドネシアの学生に話を聞く時間を設けても直接話す人の割合がとても少なく、言語の壁があるかもしれないが、インドネシアの学生が話しかけても、返さない人も中にはいた。海外の人たちはオープンマインドであるのに、日本人が閉鎖的であること、さらには異文化交流に対して興味を示してもらえない子供達がいることから、子供達に異文化について興味を持ってもらえる機会が少なかったことが今回の問題につながったと考える。いきなり外国の方に合わせるのではなく、まず異文化についての興味を持ってもらえる機会を与え、異文化に対する恐怖心を減らしていくことが必要であったと考える。語学学習の必要性に対する気づきが遅いことも考えられ、これからイベントだけではなく地域形態において異文化に興味を示してもらえる機会を増やすことが必要であると考えた。

そのためには私たちも積極的に小学校などに足を運び、デジタルストーリーテリングの普及活動をしていくことも必要であると思ひ、今後私たちのゼミは、小学校においてデジストの普及活動を今以上に進めていこうと考えている。

### (2) カンボジアにおいて、現地での発見（メディアリテラシー自習を通して）

（言葉に頼らないコミュニケーションの重要性）

メコン大学やトントローチ小学校、ア

ンティエ幼稚園に足を運び、日本語も英語も話すことができず、話そうとしても何を話せば良いのかわからない場面に何度も直面した。そのような中で、互いに片言の英語や日本語を使いながらゆっくり丁寧に説明することが重要であると気づき、異文化交流において必要なものは「話す力」ではなく「話そうとする力」であると考えている。また時間をかけて交流する中で、言語の壁を超えて親密な関係を取ることができることも経験できた。

#### (途上国に対する寛容さ)

日本では当たり前だが、海外では当たり前ではない。異文化を体験することによって、それまで抱いていた固定概念や偏見が薄れ、他国の独自の文化や慣習を受け入れることが必要であると感じた。日本においては途上国に対しての報道コンテンツが他の先進国と比べてもかなり遅れを取っているために、日本人は途上国に対して誤解と偏見にまみれていると考える。カンボジアといたら多くの人がボランティアで行く国であったり、とにかく治安が悪いというイメージが強い人が多い。しかし、現地では著しく経済発展している都市もあり、東京という先進国に住む私たちは先進国という立場からしかものを見ていなかったことに気づかされ、カンボジアの文化や人々と触れ合い、私たちは視野を広く持ち、多様性を認め合うことができた。大切なのは

途上国に対する寛容さであり、特に日本においては先進国だけではなく、途上国においても、もっと目を向けることが必要であると考えている。

#### (課題)

カンボジアにおいても貧富の差を感じることはあり、学校に通い、日本語で会話できるほど教育を受けている学生がいる一方で、道で物乞いする子供たちも少なからずいた。今回行くメンバーは全員初めてカンボジアに行ったが、観光地や中心街をメインに、貧困街などに行くことはほとんどなかった。カンボジアの明るい未来を発信する上で、農村やスラム街などにも足を運び、カンボジアの現実をもっと知る必要があると強く感じた。

#### (今後)

これらの経験を生かし、私たちのゼミでは、途上国で数々の経験をした私たちが率先して悪いイメージを払拭する活動を起こしていく必要があると考えた。まだ具体的な案が定まってはいるが、今回の訪問したメンバーで、カンボジアが良い国であると広めていく広報活動を起こしていこうと考えている。また今回、カンボジアに対するイメージが覆されたことから、私たちは普段の情報をそのまま受け取るのではなく、批判的な見方で、メディアの正しい情報を手に入れなければならないことを再確認できた。

# 社会問題解決に向けた学生発ソーシャルビジネスの企画と実施

代表者：田中ゼミ 山下貴史

## 1 実施概要

本活動は、家族、コミュニティ、地域がかかえる社会問題の中で、とくに、貧困、生活環境問題、シングルマザー、失業、自殺等について発生要因を分析し、ソーシャルビジネスのアプローチから問題の解決にむけて取り組んでいくことを狙いとしてきました。まず、出発点としてわれわれ学生は何かできるのかをアイデアピックアップ方式で議論しました。

そこであがったテーマを本企画の柱に据え、具体的には、①社会問題を解決するソーシャルビジネスリテラシーを養うワークショップの開催と、②社会問題の現場や関係者へのインタビュー調査を行いました。

当初の計画通り、この二つをもとに、4つの社会問題解決プロジェクト案を作成し、学外で開催されたYYC(ユヌス&ユヌスソーシャルビジネスデザインコンテスト)にエントリーしました。

ノーベル平和賞を受賞したユヌス博士を発端としたソーシャルビジネスコンテストでは、18歳から35歳までの若手がそれぞれの社会問題解決策をブラッシュアップしました。ソーシャルビジネスの事業計画については経験や知識が極めて乏しく、専門バックグラウンドをもつ社会人の方々に定期的にメンタリングと事業計画の打ち合わせを行って頂きました。

①のソーシャルビジネスリテラシーを養う企画は、本企画参加学生が事前の打ち合わせを重ね、当日のワークショップ、司会、

ゲスト講師の招聘も担当しました。講演形式ではなく、参加型のワークショップを実施し、専門的な知識を身につけていくこともできました。

②のソーシャルビジネスコンテストは、4チームがエントリーをして、そのうち1チームが1次予選、2次予選を突破し、2017年2月19日に京都で開催される本戦への出場権を獲得しました。関東地区から本戦へと進んだ学生チームは、本企画の1チームのみです。他のチームは、30歳以下の若手社会人のチームです。毎回のプレゼンテーションには、大学教員、ソーシャルビジネス関係者が審査員をつとめ、緊迫した中で貴重な経験を積むことができました。

下記、①のワークショップの実施内容をまとめます。

第一回 4月20日 ゲスト講師招聘 ワークショップ内容：ソーシャルビジネスの意義

井上良子 九州大学ソーシャルビジネス研究センター特別研究員

\* ソーシャルビジネスの国内外での展開、理論的背景について、専門知識の提供とその後、グループワーク形式で社会問題のカテゴリー化を行った。

第二回 4月27日 ゲスト講師招聘

ワークショップ内容：学生発ソーシャルビジネスの可能性

小川昌宏 クラウドカンパニー代表取締役  
株式会社ソフトバンク

\* ソーシャルビジネスと IOT の関係性について最新動向の知識提供を受け、その後、インタラクティブな質疑応答形式で、ソーシャルビジネスの可能性について議論を重ねた

第三回 5月18日 ゲスト講師招聘

ワークショップ内容：ソーシャルビジネスに必要な事業計画・資金面

田中慎一 株式会社インテグリティーパー  
トナズ代表取締役

\* ソーシャルビジネスの事業計画や資金調整・資金調達について、財務や会計の知識の初歩的な解説を受け、その後、質疑応答を行った

第四回 6月1日 ゲスト講師招聘

ワークショップ内容：“ふるさと納税”を通じた地方問題の発見と解決策

須永珠代 株式会社トラストバンク 代表  
取締役

\* ソーシャルビジネスの国内事業として注目される地域復興・再生モデルについて、現状と活動の方向性について理解を深めるとともに、各グループでの問題設定を行った。

第五回 6月22日 ゲスト講師招聘

ワークショップ内容：社会問題解決に向けた必要な事業サイクルの検討

前田鎌利 一般社団法人継未 代表理事  
プレゼンテーションクリエイター

サイバー大学客員講師

\* 各グループでの事業計画をプレゼンし、その内容のフィードバックを頂いた。プレゼンテーションの伝え方、事業計画の甘さにも再検討の必要性が明らかになった。

第六回 11月8日 ゲスト講師招聘（公開

国際イベント）事前告知ポスター制作

講演会内容：Guitar 製造過程の材木保護、グローバルソーシャルビジネスの展開

Bob Taylor 株式会社 TAYLOR GUITAR 代表  
取締役社長

虎岩正樹 残響塾塾長、元シルクドソレイ  
ユ専任講師（通訳兼モデレーター）

\* Guitar 製造過程の材木保護とグローバル  
ソーシャルビジネスのこれまでの展開、  
現状の課題等を講演頂き、その後、デ  
ィスカッションを重ねた。

第七回 12月13日 ゲスト講師招聘

ワークショップ内容：最新のテクノロジー  
と服のソーシャルビジネス

西村真里子 株式会社 HEART CATCH 代表  
取締役

\* 最新テクノロジーとファッションの動向  
について、ソーシャルビジネスの観点か  
ら10人がそれぞれビジネスアイデアをプ  
レゼンし、フィードバックを頂いた。そ  
の後、専門知識の提供をうけた。

第八回 12月20日 ゲスト講師招聘

ワークショップ内容：エシカルファッショ  
ンを通じたソーシャルビジネスの動向

鎌田安里紗 慶応義塾大学政策・メディア  
研究科

\* エシカルファッションとグローバルな貧  
困問題についてワークショップを行った。

## 2 結果・意義・所見

・ ソーシャルビジネスの最新動向のキャッ  
チャアップとビジネス立案にむけて走り続  
けた9ヶ月間

その結果本活動助成メンバーから4チ  
ームがエントリーし、1チームが本戦出場をき  
めた

8/6 一次予選 学生トップで通過

1/14 二次予選 学生唯一二次予選通過（残りの通過チームは社会人チーム）

### ・本企画の意義

世界で起きた火種を消す手法の深慮は、人類の抱える永久の課題です。社会問題は孤島の火事ではありません。企画を遂行して見えたことは、社会問題に立ち向かい続けることの難しさと、世界には日本では到底考えられない社会問題が起きているということです。難民によって生活場所に困窮する人々の増加、高齢者増加に伴う労働者人口減少、毎年1%ずつ人口減少など、世界で起きていることに対しての問題解決に立ち向かう能力は身につけるべく能力です。

今の私たちの身の回りはあまりにも満たされています。生活に困窮することはなく、家族と暮らし学校に通うこの生活は、決して当たり前ではありません。

本企画の出発点は、「大学生として社会問題にどう向き合うことができるか」を掲げました。社会問題の解決策について調べていくと、グラミン銀行創設者（2006年ノーベル平和賞 受賞者）であるムハマド・ユヌス博士が提唱するソーシャル・ビジネスに行きつきました。ユヌス博士が提唱するソーシャルビジネスには、若者がもつ“Passion”“Creativity”“Technology”を最大限に活かし、自立的・持続的に社会的課題を解決することが説かれています。

本企画メンバーの1人は、離島に暮らす祖父母を災害で亡くしました。あまりの突然の出来事で言葉を失い、自分の無力さに一時期何も手につきませんでした。けれども、周囲の高齢者たちと災害復興にむけた取り組みをともにして、学生自身が救われました。

こうした経験からより深い人間関係を世代を超えて築いていきたいという考えの元で、当企画をメンバーとともに実施してき

ました。また、1人は地方に暮らす祖父母を思い、少しでも気にかけてくれる人がいてほしい、そういった想いを具体的な形にするべくプランを検討しました。

様々な問題が発生してくる日本社会の問題に対して、若い僕らだからこそ出来ることを身近なところからの取り組みを検討しました。具体的には、YYCユヌスソーシャルビジネスコンテストでは社会人から学生まで、多種多様な社会問題をテーマに掲げ、チーム一丸となって大海原へと挑戦しました。

本活動団体からは4チームがエントリーし、1チームが学生トップの成績で予選通過し、現在もなお継続しながら社会問題の解決にむけた立案をしています。何度も解散し諦める手前に行きながらも、歯を食いしばって立ち向かう継続力こそ、何よりの価値です。

そしてその結果2017/1/14に開催され二次予選も突破し、2017/2/19に京都で開催されるYYCユヌスソーシャルビジネスコンテスト本戦への出場権を手に入れました。ここで出た成果こそが向き合い続けたこの1年間の励みになりました。今後の財産となり、血となり肉となります。孤島の火事場ではないことに気づき向き合い続けたこの時間こそは、まさに課外活動で得られる、経験的価値だと思います。

### ・所見

ビジネスの立ち上げの難しさを肌で痛感したこの企画は、様々なフレームワークの使い方をワークショップを通じて学びながらチームビルディングの重要性をも学びました。通常の大学の授業では決して学べない実践的な学問が、強力な社会で活躍されている社会人から直々にマンツーマン指導していただけるこの環境こそ、急速に成長できる仕組みになっているように感じまし

た。

本活動は、各回のゲストにも、「ソーシャルビジネス」に関する専門知識の提供やワークショップを依頼しました。学外活動と学内活動を並行させて実施して、より実質的な学びとなりました。とくに、常に「なぜやるのか」を問いかけ続けるこのマインドセットこそ、社会に出た時に最も必要な問いかけです。サービスが誰かのためのものでなければ、このサービスはただの自己満足にしかありません。ソーシャルビジネスに必要なことは、社会が驚愕するサービスではなく、誰かが抱える問題を解決するサービスを見つけ出すことです。そして的確な解決方法を見つけ出し、社会との隣接したこのサービスこそが社会のイデオロギーおもなくしてしまう、ソーシャルビジネスになるのです。

#### ・見えた壁

新しいサービスを導き出すことは容易なことではありません。今回実施して改めて感じたことは、新しいサービスは全く0からは成されないということです。誰かが抱える課題を解決することこそがビジネスなのです。例えば時間が短縮される。値段が安くなる。簡単になることの3つのフレームワークで世の中のビジネスは成り立っているのです。しかしこの3つの簡単な考え方なのに、なぜか僕らには大きく重荷となって僕らの前に立ちはだかっているのです。この壁を乗り越えようとするところこそ、学生気分を卒業し、もう2年先に来る社会に出て立ち向かい続ける基礎体力を身につけるべくトレーニングをし続けていかなければならないのです。

今回断念したチームや1次予選で落選したチームなど、ビジネスコンテストを通じて、誰しもが歯がゆい思いと立ち向かい続けることに逃げようとする自分の弱さに直面しました。しかしこの悔しさとともに、社会の厳しさを教えてくれた大会や、厳しい叱咤激励をしてくださるメンターさんや大会運営者の方々の言葉こそ、僕らがまず直面した1つの壁として受け止め、次なる挑戦に繋げていくところこそが、この1年間の課外プログラムの大きな成果の1つです。

#### ・総評

社会の厳しさは、私たちが容赦なく待ち受けています。今回多くのゲストから学んだ1年と、ビジネスプランコンテストで学んだワークショップの1回1回の内容こそ、私たちの社会的経験値になるのです。

感受性を殺して生きる人生と、自らのキャリアデザインのために、必死になって生き抜く人生の選択肢は、どこに向かって、生きていくかの目標設定によって、間違いなくその人のキャリアデザインに大きな変化をもたらしていきます。キャリアデザインをしていくためには、間違いなく“ワークキャリア”と“ライフキャリア”のバランスは無視できません。

「生きるを学び、働くを知る」この言葉に向き合う1年間となり、次年度さらなる飛躍を遂げるための1年となりました。この1年で得た社会的繋がりを大切にしながら、更なる活躍を出来るよう、ゼミ生一同チームとして次なる1年を迎えます。本助成金なくして、本活動の実現はありませんでした。記して、感謝いたします。

## 選挙を通して考えるシティズンシップ

### ～一橋高校定時制「主権者教育」授業～

代表者：筒井ゼミ 金昇珠 報告者：鳴海友理

## 1 実施概要

一橋高校と筒井ゼミのコラボは今年1月から行っているブリッジワン・スタディサポートでのつながりからお誘いをいただき、実現した。都立一橋高校定時制課程では朝・昼・夜の3部制で授業が行われており、入学時の1学年の人数は240人ほどである。しかし、外国にルーツがある/中学不登校/学力の厳しさ/コミュニケーションが苦手/家計がしんどい、という生徒の多様な背景から、退学率が高く、卒業可能の3年次においては3割減ってしまう。

今回、一橋高校での「主権者教育」授業でファシリテーションを行なう際に、このような生徒たちの状況等を踏まえたうえで、マニフェストの読み比べや模擬投票ではリアリティがないのではないかと考え、授業づくりから一緒に参加することとなった。

### 【当日までの授業づくり】

高校生に寄り添った授業を創るためにまず行ったのが、授業指導案の検討である。そもそもこの「主権者教育」は学校制設定教科の「人間と社会」の中で実施されるが、その授業で使われる教科書・教科書指導案を実際に見ても、政治に参加するというイメージはわからないため、意見交換をし、どうしたら高校生が分かりやすい内容になるかを検討した。また、一橋高校の角田仁先生が実際に作成してくださった授業の指導案をもとに、難しすぎる内容・現実的でない案を削り、代替案を考察した。この検討

の際に我々が大事にしたのが大学生という立場である。まだ政治参加に対する実感がわからない高校生と、伝えたいことがたくさんある教師（大人）、両者の間にいるという立ち位置を意識しつつ、繰り返し検討を行った。

「主権者教育」の授業は全4時間で構成され、私たち大学生は3.4時間目にあたる授業に参加することになっていた。しかし、実際に授業を行う前に授業の様子を自分たちで観てみようということになり、6/15に行われた授業の見学に行った。この授業では政治＝大文字の政治ではなく身近にも存在することを伝えるために生徒に「学校・仕事・暮らし、将来」での変わってほしいことを書き出してもらった。多くあがった意見としては、学校内の設備の設置、高校生のアルバイト問題、税金問題などである。この授業見学を通して、授業に対する生徒の姿勢や興味を持つ内容にするためには工夫が必要だという、見学したからこそその発見があった。

その発見をもとに、反省会を行ったところ、当初考えていた請願書づくりや模擬投票では生徒に現実味がないこと、限られた授業時間内で終わらせるためには高校生にとって一番身近な「世論の形成」に時間をかけるべきではないかといった声が上がった。そこで、6/20の授業前最後のMTGで内容を変更し6/29のファシリテーション本番に臨むこととした。

## 【当日のファシリテーターの動き】

授業当日の流れとして、「政治の動かし方」→裁判に訴える、法律を作るといったことに加え、twitter等で自分の思いを広めて世論を形成する方法をファシリテーターとして提示した。何度も話し合いを重ねていたため、準備万端だと思っていたが、グループワークが間延びしてしまったり、時間配分の難しさ、模造紙づくりの際の雰囲気の和らぎ、また生徒がSNSでの政治参加に興味を示すなど、予想外の出来事が数々起こった。

授業後すぐに反省会・修正を行うことで1部の授業の反省を、2、3部へと生かすことが出来た。2部以降での大きな変更は2つである。1つはより身近にすることである。「法律を作ろう」と言っても、なかなか難しく考えにくい。しかし「SNSで自分たちの意見を拡散」と考えると、より身近で「自分達にもできそう」と感じる。身近に感じられるエピソードを多く盛り込めるようにした。2つ目はより気軽にということだ。初めは椅子に座ったまま話し合っていたが、これだと人と人の距離が遠く、緊張感がある。2部以降で模造紙を囲む形をとったことにより気軽に発言できる雰囲気を作り出すことが出来た。

このようにして改善しつつ作った授業の中ではまさに高校生ならではの意見が多く出た。例えば、安全性や義務教育期間を考慮したうえでの、中学生へのアルバイトを許可するという意見やシフトの自由化を願う意見だ。ここには定時制高校ならではの、時間の使い方の希望も現れていると考えられる。

## 2 結果・意義・所見

企画実施後の結果として、ファシリテーターとしては、授業に参加し、予想外の出

来事が起こった時に求められる臨機応変な対応や生徒の様子を見て授業の進め方を変えていく難しさを実感した。ファシリテーションをする中で、思っていた反応が起こらなかったり、時間通りに進めることが出来なかったりと、戸惑ってしまう場面も多かった。

しかし、全3部の授業を終えて角田先生が私たちに伝えてくれたこととして「(できなかったことや反省点を) どうポジティブに捉え、達成したことを見つけられるかが肝」ということがある。この言葉を励みに、予想外のことはあったものの、その反省点を2部、3部の授業へとすぐに生かすことが出来たのは良かった点の1つだろう。

それを踏まえたうえで授業を振り返ると私たちが作り上げたのはオルタナティブ主権者教育ということだ。普段の授業では味わえない「発信型」の授業にすることで「大文字の政治」に関心を持つ手前の活動として作り上げられたと言えるだろう。

一橋高校定時制には多様な家庭環境や学力への困難を抱えている生徒が多く存在する。自分たちの身の回りの生活(学校・仕事・暮らし、将来)を軸に考えることで、「大文字の政治」を身近に、自分たちの中に落とし込んで考えることが出来ただろう。

今回の授業を通し、生徒は自分から気持ちを文字や言葉にする[Action]、みんなが理解できるものを創造する[Thinking]、役割分担し意見交換をしてまとめる[Teamwork]を経験した。これは、シティズンシップの技法(democratic skills)と同じであり、社会参画には不可欠な手段である。

そしてこれはファシリテーターの技術によって濃度が変化することを我々大学生は学んだ。今回私たち大学生は、作る側として授業に参加したことで難しさも知ったとともに、成果をあげることが出来たときの

楽しさも学んだ。これは授業づくりに1から関わったからこそ体験できたものであり、授業という教育現場に参加できたことは意義のあることだ。

今後ファシリテーターとして授業に参加する際には、いかに生徒の興味を引く内容にし、生徒が自ら参加できる授業にできるか、そしてその時々状況を見て進め方をいかに変えていくことが出来るかが課題といえる。

また、これらの詳細については、2016年10月28日のキャリアデザイン学部シンポジウムで報告した。筒井ゼミ報告内容として、以下の構成で報告を行った。

1. 都立一橋高校定時制課程の概要（筒井美紀）
2. 18歳に寄り添った授業にするために（遠藤めぐみ）
3. より身近で、敷居の低い主権者教育（細井美結）
4. 私たちのオルタナティブ教育（鈴木美波）

筒井ゼミの報告に対するフロアからの感想としては、以下のものがあつた。

「話し手の話し方・スピードが聞き取りやすかった」

「大学生があそこまでファシリテートできるとは驚いた」

「大学内だけでなく外部とのコミュニケーションを含めた学びを行なっていることが興味深い」

「定時制の生徒たちがどのような議論や

葛藤を経て、どのような作品を作ったのか、生徒たちのリアルが知りたい」

こうした意見をふまえると、今後報告する際には、今回とは違う切り口（生徒に焦点を当てる等）での報告方法も検討していきたい。また、シンポジウム全体の感想としても、

「キャリアデザイン学部の可能性を感じた」

「フィールドワークの重要性を知った」

という意見が多く、このシンポジウムが学部での学び方について考えるきっかけになったと言えるだろう。

シンポジウム後のレセプションでは、ある高校の先生方から、「我が校でもファシリテーションをしてほしい」との依頼も受けた。18歳選挙権が適用されたことに伴い、「選挙」「政治」というものをいかに高校生の生活の中に取り入れ、興味をもってもらうかは今後の課題であり、多くの先生方にとっても興味深いところなのだろう。

我々大学生が、生徒ではなく先生でもない、中間の立場、大学生だからこそ伝えられること・出来ることは何かを考えることも、これから授業づくりをする上での課題の1つだ。今回ファシリテーションをしたのは定時制高校であったが、今後、他の高校でもファシリテーションをする機会があれば、その高校のニーズに合わせたファシリテートの仕方を考える必要がある。

シンポジウムを通し、それぞれの高校でオリジナルの主権者教育を創り出していくことの重要性についても考えさせられた。

# ブリッジワン・スタディサポート

## (都立一橋高校定時制学習支援)

代表者：筒井ゼミ 堀江拓也 報告者：櫻田泰史

## 1 実施概要

### 企画概要

本企画（ブリッジワン・スタディサポート）は都立一橋高校定時制での学習支援、進路相談等の高校生のキャリア形成支援である。この活動は、同高校と本学とで協定を交わしたうえで、2016年1月に開始された。

活動を行った都立一橋高校は昼夜間三部制の定時制である。定時制高校は生徒の学力、家庭の状況などが多様で、中退する生徒も多く、同校でも進路が未定のまま卒業する生徒が4割近い。本企画は、学習面や心理面での支援を通して、定時制高校生徒の通学継続や卒業・進路決定につなげることを目的とした。

本年度は

- 1) 定時制高校でのキャリア形成支援
- 2) 高校文化祭での上記活動の紹介
- 3) 一橋高校教員とゼミ教員を交えた2度の意見交換・振り返り

を実施した。

メンバーとしては、筒井ゼミ生と遠藤ゼミ生とが、前者が過半数をしめるかたちでスタートした。秋学期には、新入ゼミ生の2年生が加わるなど、若干のメンバー変動があった。

以下では、それぞれの活動内容の詳細を記述する。

### 活動詳細

#### 1) キャリア形成支援

一年を通じて一橋高校の教室内で生徒への学習支援、交流などを行った。活動は昼（12:10～12:50）と夕方（16:15～17:30）の2枠。活動の内容はメンバーのみに公開するSNSのページに記録を投稿し共有した。記録は適宜、エクセルシートに転記し、ピヴオット・テーブルを用いた分析ができるようにした。また、参加してくれた高校生には、活動ノートにコメントを書いてもらい、高校と共有した。

活動の実施日は

- 一学期：4/22～7/11の期間、月・木・金の昼及び夕方。活動日は計26日。
- 二学期：10/3～12/1の期間、月～金の昼及び夕方（ただし、水・金は昼のみ）。活動日は計30日。
- 三学期：1/11～2/22の期間、二学期と同様の枠で計31日の活動を予定している。

一学期は延べ129人、二学期は延べ84人の生徒が教室を訪れた。

各時間帯で学生二名程度が生徒に対応した。学生は12名が参加、全員の活動参加回数の合計は146回だった。

#### 2) 一橋高校文化祭での活動紹介

10/1一橋高校文化祭（柏葉祭）でブリッジワン・スタディサポートの広報活動を行っ

た。活動内容は、同高校内でのチラシ配布、メンバーによる手品披露。

この文化祭での活動のために、9月下旬に当日上映する活動紹介動画、配布物、掲示物作成などの事前準備を行った。

文化祭の準備 and/or 当日の活動は佐藤、細井、小島、中川、西原が担当した。

### 3) 意見交換・振り返り

各学期末に一橋高校の担当教員、副校長、法政大学のゼミ教員を交えた会議、振り返りを行った。一学期末は8/2、二学期末は12/26に一時間～二時間程度行った。

学生からは、佐藤、細井、西原、桜田、小島、中川、堀江、伊加が参加した。ゼミ教員は筒井先生、遠藤先生、一橋高校からは担当してくださっている角田先生と久保副校長、沖山副校長に参加していただいた。

### その他活動

高校生の進路・キャリアの課題について知るために、文献による学習・調査を行った。

また、1/15(日)に実施された、学校説明会(同校への進学を考えている保護者・受験生に対する説明会)に、本活動の紹介パンフレットがあると有り難い、と久保副校長先生より依頼があったため、A3一枚あるいはA4一枚のパンフレットを年末年始に作成した。

## 2 結果・意義・所見

定時制都立一橋高校での学習支援、キャリア形成支援活動を通じた成果、得られた知見を記す。まず、活動の結果・成果について述べる。その後、成果・知見・特徴をあげ、活動の改善点を上げる。

### 活動の結果・成果

参加した生徒は一学期、二学期を通して

約30名、延べ人数は213名である。最も来室した生徒は32回、10回以上参加した生徒は6名いる。

一学期は活動日一日当たり約4.9人の生徒が参加していたが、二学期では一日当たりの生徒数は2.8人と減少している。これは、二学期の活動が10/3(月)開始であり、始まるまでの期間が空いてしまったこと、一学期とは教室が変更になったことも原因だと思われる。曜日による生徒の変動も大きく、二学期では火曜日に参加する生徒が他の曜日に比べて少なかった。生徒は特定の曜日、時間帯に継続して参加することも多いため、こうした生徒の有無が、曜日や各活動日における生徒数のばらつきに繋がっていると考えられる。

今年度の活動で延べ200人を超える生徒が来室したことは、大きな成果だと考える。

### 企画の意義・知見

次に、学習支援の意義・有効な取り組みについて、明らかになった知見を3点あげて、述べる。

本活動の知見の一つ目は、学習支援の居場所作りとしての効果の大きさである。

約一年間の継続した活動によって、参加する生徒の居場所として機能していったと考える。特に生徒のうち、5・6人は頻繁・継続的に活動に参加しており、彼らにとっては居場所・人間関係の場として、大きな意味があったと言える。

例えば、クラスの先生に勧められて参加したある生徒は、当初は会話に詰まることも多く、声も小さかった。しかし継続して来室し学生らと会話するようになり、学生との間では非常に打ち解けて会話ができるようになった。二学期の後半には、笑顔や冗談が見られるようになった。また、参加していた他の生徒を交えた会話やトランプのゲームに参加するなど、次第に学生以

外とも交流することができるようになっていった。

居場所としては、高校の教員でも生徒でもない立場である大学生の活動であったことも意味があったと思われる。大学生による活動は、登校継続や学校での新たな体験・経験や変化を助ける居場所としての役割を果たすことができると考える。

二点目の知見は、学習支援を学校内で実施する有効性である。学校内で活動することによって、自発的に参加する生徒以外との関係の構築・継続ができたと考えられる。

学習支援といった自発的な取り組みに参加する生徒は、あまり多くない。一度参加しても、その後継続できる生徒の数も少ない。二学期末のミーティングでは、高校の先生方からは、本活動に参加する生徒の多くは部活動など他の活動にも積極的であるとの言葉があった。

本活動は、授業の合間に校内の教室で行った。学校内での活動であるために、自発的に訪れる生徒以外との関係や参加するきっかけ作りが容易になった点があると考えられる。

活動するにつれて、先生に強く勧められて一度だけ入室した生徒や、一度友達に誘われて参加した生徒も増えていった。そうした生徒がその後継続して参加することは少なかったが、活動の前後に学校内で顔を見かけ挨拶や少し会話するようになった。こうした生徒との関係の継続が、その後の参加につながることもあった。また、廊下などに出て声かけを行ったことで参加した生徒や、文化祭に参加したことで覚えていて挨拶してくれる生徒もいた。一貫して学校内で活動したことで、多様な生徒と関わることができたと言えるだろう。

学校内で学習支援活動を行うことで、自発的に参加する生徒以外とも関係を築き、活動に参加する可能性を増やしていくこと

ができると考える。

三点目に、定時制高校の多様な生徒への適切な支援の必要性を知見としてあげたい。

定時制高校では、不登校などを経験している生徒や外国にルーツを持つ生徒も多く、また学力の程度もばらつきが大きい。活動を通じて、こうした定時制高校の難しさが明らかになった。

日本語がほとんど喋れず、学校の友達とは中国語で会話をしている。朝起きることができず、遅刻が非常に多い。アルバイトを始めて忙しくなり、勉強する時間が短くなる。学力面では、高度な数学ができる生徒がいる一方で、小学校高学年の漢字につまずく生徒がいる。こうした、多様で場合によっては個別の対応が必要な生徒とも多く関わった。

生徒個々の課題に適切に対応することは難しい。しかし、こうした課題を抱える生徒が活動に参加できることが、望ましいだろう。知見の一つ目に見たように、学習支援の活動には勉強面だけでなく、居場所としての意義も大きい。より多くの生徒と関わるためには、学習面と共に、生徒との接し方などについても適切な準備が必要だろう。

### 活動の課題

活動の課題として、学習支援としての活動の不十分さと学生のスケジュール、人員確保の問題が明らかになった。

学習のために参加する生徒の数は多くなかった。学生と親しくなっていくと、勉強ではなく、話すために訪れるようになる生徒もいた。また、数学や理科など、学生がうまく教えることができない科目もあり、勉強面で大きな成果を上げたとは言えない。学習面だけが目的ではないものの、学習の場としてもより大きな役割を持つようにし

たい。

学生の確保という点も課題である。高校と大学では長期休暇の時期が違い、そのために活動のない期間が出てしまった。学生

の授業が確定するまでは、スケジュールや人員の確定が難しい。活動の幅を広げるためにも、より余裕を持った学生の確保や予定の確定を行うことが必要だろう。